多義語内部における有契性：「かたづく」「かたづける」について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1991-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西尾, 寅弥 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1510

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

多義語内部における有契性

――「かたづく」「かたづける」について――

西尾寅弥

はじめに

語の多義性は、きわめて普遍的な現象である。研究の立場からも、多義語は現在の意味研究にとって、非常に大きい課題である。一つの多義語について、多義をどう区分し、いくつの意味を認めるべきかという、あまりに基本的な問題もまだまだ未解決に残されているところが大きいとみられる。小稿は、このような基本的な大きい問題に直接かかわろうとするものではなく、一つの多義語内部の意味どうしの間の関係について、共時論的に、また通時論的にしらべてみて、両者をつきあわせてみることを試みる。具体的には、「かたづく」の〈嫁に行く〉という意味、「かたづける」の〈嫁にやる〉という意味を中心にみていくことにする。

一

NHK放送文化調査研究所が一九八六年三月に行った「働く女性のことばの意識」という調査がある。(1) 二十歳以上の首都圏の勤労女性三六三人を調査対象とした予備調査的なもので、いろいろな項目のなかの一つに「抵抗感のあることば」

というのがある。六六項目の語句について「女性の立場からみて抵抗感のあることば」に○印をつけることを求めたものである。○印をつけた人が一〇％以上ある三四項目を抵抗感度の高い順から示したグラフがあるが、上位の五項目は（カッコ内は％）

女のくせに（七四）　女だてらに（六〇）　女子供（五八）　男は外、女は内（五五）　娘をかたづける（五二）

で、「娘をかたづける」は六六項目の中で第五位と、かなり上位になっている。これと意味上関連の深い「嫁ぐ」は三三位（一一％）、よく問題にされる「主人」は三四位（一〇％）で、これらの約五倍の人が抵抗感ありとしたわけである。

この調査の行なわれる前年に、私はたまたま「かたづける」「かたづく」について小さいアンケート調査を行っていたが、それの内容や結果は後に述べることにして、ここで現代語の「かたづける」についての意味分析の結果を見ておくことにする。

まず、國廣哲彌編『ことばの意味3　辞書に書いてないこと』(2)に「シマウ・カタヅケル」という項目があり、終りのほうに検討結果が次のようにまとめられている。

シマウ　＜使わない物を＞＜収納場所へ＞＜入れる＞

カタヅケル　＜場所の機能を発揮させるために＞＜場所ふさぎの物を＞＜移動させる＞

このまとめの前に

邪魔者をカタヅケル（＝殺す）。

娘をカタヅケル（＝嫁にやる）。

仕事をカタヅケル（＝やり終える）。

をカタヅケルの転用法としてあげ、＜場所ふさぎ＞の「邪魔物」を対象とするところから生じた用法だと説明している。

森田良行『基礎日本語3』[3]では「しまう」の項目のあとに「かたづく　かたづける」が関連項目としてとりあげられている。

(1)乱れていた状態を整理する

(2)そこにある物を処理する

(3)お荷物になっている人間を目的どおりに処置する

と三つにまとめられている。(1)には「部屋を片づけて布団を敷く」「おもちゃを片づける」のような例、(2)には「仕事をすっかり片づける」「宿題が全部片づいた」のような例があげられている。(3)は

特に「娘を片づける」（嫁入りさせる）「邪魔者を片づける」（追放したり、殺したりする）などの言い方として用いられる。これも、当人の気に掛かっている責任感や迷惑感を、その人間をある状態にさせることによって取り除く「片づける」の心理に合致する。

と記述されている。

右の二書の記述の様式はかなり違っているが、分析の内容には当然ながら相通ずるところが大きいと言えよう。

国語辞典の語釈ではどのように記述されているだろうか。一例としてまず、『旺文社詳解国語辞典』の「かたづける」をみると

①物を納めるべき場所に納めて、きちんとした状態にする。整頓する。「道具を片付ける」「部屋を片付ける」②処理して結着をつける。「事件を片付ける」「仕事を片付ける」③邪魔な者をなくす。殺す。「裏切り者を片付ける」④娘を嫁入りさせる。「娘を片付（嫁）ける」

と記述されている。（自動詞「かたづく」の項も他動詞「かたづける」に対応させて四つの意味が記述されている。）他の辞典にも同様な四種の意味をあげているものが多くみられるが、〈じゃま者をなくす(殺す)〉の意味を「俗語」と限定す

るもの、またこの意味を除いた三種の意味だけをあげるものもある。また、『新明解国語辞典』は「かたづく」を大きく「片付く」と「嫁く」に二分している。このように国語辞典における多義性の扱いかたはさまざまであるが、〈嫁に行く〉〈嫁にやる〉の意味は、たいていの辞書で一つの項目を与えられているようである。

なお、語釈の注記風のコメントとして、『岩波国語辞典』の「かたづく」の〈およめにいく〉について、「多く、親の立場から言う」という補足的説明があり、『例解新国語辞典』の「かたづく」の〈およめにいく〉の意味に関して「表現」の欄に次のようにある。

せいぜい、およめにいく人の身うちの人が言ってよいことばで、他人が、「あの人のむすめもやっと片付いた」というと、じゃま者あつかいをしているみたいで、あまりいい感じの言いかたではない。

以上にみてきた意味分析や辞典の語釈からすると、「かたづく」「かたづける」の〈嫁に行く〉〈嫁にやる〉という意味は、それぞれの動詞の基本的な意味ではないが、派生的な意味としては地位を確立しており、〈邪魔物が除かれる〉を除く〉の意味とともに、〈整理整頓する(される)〉あるいは〈決着をつける、解決される〉という意味が転用されて生じたものだと理解される。

右に専門家による意味分析の結果と国語辞典における意味記述をみたが、それらの内容の基盤になっているはずの、一般の人々の意識についてさぐりを入れてみたいと考えた。そして、「かたづく」「かたづける」の、〈とつぐ〉〈とつがせる〉の意味を中心とし、その意味にまつわる性差別的な問題点を視野に入れて、若い女性を被験者として自由な記述を求めた。実施したのは昭和六〇年で、対象は大妻女子大学の短大国文科二年E組の四七名（および参考資料として同大学の若い女性若干名）であった。ある質問紙調査の末尾に、付録的に次のような質問を設けた。

もうあまり使わないかもしれませんが、「私は去年、この寺にかたづいてきた。」「娘を三人ともかたづけて親の責任

をはたした。」のような言い方があります。あなたは、この言いかたについて、どう感じますか。思うままを自由に書いてください。

結果を見て、右の質問内容があまり適切でなかったと気付かされたところがある。それは、「私は去年、この寺にかたづいてきた」という例文であって、たとえば

(1)あまり聞いたことがないのでよくわかりませんが、この場合のかたづくは「お坊さんになる。世俗をすてて、仏道に入る」という意味ではないかと思います。

というような答えが散見し、「頭を丸める」という意味だという答えもあった。「はじめて聞いた」「意味がわからない」という答えが大半であった。質問者としては、寺に嫁してきたという意味のつもりであったが、文脈抜きの例文としては不適切であったと考えられる。次の答えは、この点をもっとも適切に指摘してくれている。

(2)「かたづく」という言葉は、例えば娘が結婚したときに「うちの娘もかたづいた」などと使うことがある。しかし一般的には、「かたづく」は他動詞的に「〜をかたづける」と使う方が多いと思う。例文の二文でいえば、前文の「私は去年この寺にかたづいてきた。」は、私には、少し不自然にきこえる。

右の事情があるので、やむをえず後者の例文について記述した答えの部分にやや重点を置いて以下に述べていくことにする。

四七名の答えの中のかなり多数に見られた共通の特徴は、次の答えに代表される。

(3)本来「かたづける」という語の意味は物などをちらかっている状態から移動させてきちんとした状態にすることだと思います。「娘を三人ともかたづけて…」のような言い方はわりと耳にしますが、本来のこういった「かたづける」という意味から派生したものであると思います。本当は物に対して使う語が、だんだん人に対しても使われるようになったのだと思います。

すなわち、「娘をかたづける」のような言い方は、散らかっている物などを整理するような意味からの転用だという意見で、

(4)「かたづける」という言葉は、普通「物をかたづける」というふうに使うので、それを人に使うと乱暴な感じを受ける。

(5)人間を物のような扱い方をしているようであまりよくない表現だと思います。

なども同様の趣旨に、否定的な評価を加えたものだとみられる。これらのように、「物」「もの」という語を四七名中の一九名が、「品物」という語を一名が使って右のようなことを述べている。その中の一名だけは

(6)…普通、「かたづける」という言葉は事柄や物について使う言葉だと思いますが、そういう言葉を人に対して使うということは、自分の身内になどに使ったりする謙譲語のような意味あいがあるのではないかと思います。…

と、「事柄や物」を並べている。また、ほかに

(7)…親から見て自分の娘だから言えるのでしょうが、娘のことをそこいらにころがっているゴミのように扱っているように聞こえるからです。

と、物のなかでもきらわれる「ごみ」という語を引き合いに出している答えもある。

自由に書いてもらった答えのなかに、右に述べたような記述が多く見られたことは予想以上であったが、別に意外なおどろくべきことではあるまい。むしろ、前に引用した専門家による意味分析の結果と合致し、それらを支持する内容だと言えよう。現代語の共時態において、「かたづける」という語の意味に関して持たれている意識として、かなり一般的なものであることがわかる。

ちなみに、はじめに引いたＮＨＫの調査で、「抵抗感のあることば」のかなり上位に「娘をかたづける」がランクされる結果になった、その抵抗感の内容はこの小アンケート調査の右にみたような回答例から、かなり具体的にうかがうこと

ができる。

「かたづく」という動きの主体、「かたづける」という動作の対象物の大きい類別という観点から、現代語の両動詞をみると、

A　物（あるいは場所）

「書類がかたづく」「部屋がかたづく」

「おもちゃをかたづける」「戸棚をかたづける」

B　事

「事件がかたづく」

「人事問題をかたづける」

C　人

「一度かたづいたがまもなく別れた」

「娘を商家にかたづけた」

このような類別から言うと、三つの類を単に並立的な関係にあるものと見るのではなく、Aを基本的な主要なものとみて、CをAにもとづいている派生的なものとみる意識の傾向が強いというわけである。

二

前節において、共時論的に「かたづける」「かたづく」の意味を検討してみたが、この節ではこの二つの動詞を通時論的にしらべてみよう。この課題については、主として

前田富祺「意味の変化――『かたづける』を中心として――」（日本語学一―一、一九八二・一一）

によって語史をたどってみることにしよう。この論文で「かたづく」を取り上げたのは、「この語が特別な語であるとか、特別な語義変化を起こした語であるからというわけではない。むしろ、現代の、よく使われる、ごくありふれた語であるということで選んでみたのである」とことわられている。

四段活用自動詞の「かたづく」という語は上代から存在したことが、万葉集にある三例によってわかる。かながきの例として、家持の

……しかれども　谷可多頭伎氐　家居せる　君が聞きつつ　告げなくも憂し（巻一九、四二〇七）

があり、日本古典文学大系の頭注では「片就きて」に対して「一方が谷について」とあり、「大意」の中では「谷に近く住んでいるあなたが」と表現されている。他の二例は「難波の宮はいさなとり海片就（かたづき）て」（一〇六二）「山片就（かたづき）て家居せる君」（一八四二）というもので、前田氏は

これらの三例を合わせて考えると、「宮、家……」が「海、山、谷……」に「かたづく」という形となり、「（人の作った）何かが（自然に存在する大きな）何かのそばにある状態」を表す語として「かたづく」が使われていたことになろう。

とまとめておられる。かながき例の「谷可多頭伎氐」の「伎」が甲類のキであることから四段に活用したことがわかり、「頭」から「かたづく」と濁音であったことが推定されている。語源的には「かた」+「つく」で、カタツク＞カタヅクへの連濁現象によって「かたづく」の形が成り立った。「かた」は、その類聚名義抄にみられるアクセントから、「形、堅」「潟、方」「肩」などでなく「片」の意味のもので「かたはら」「かたがは」の意味と共通するものである。「かたづく」と類義の語としては「かたそふ」「かたよる」が考えられ、「つく」は「よる」や「そふ」と似通った意味を示すことになる。結局、現代語の「かたづく」とは明らかにことなっている「かたづく」の原義は、

（山・谷など何か大きなものの）かたはらにやや小さなものが付く

ことであった。なお、上代には現代の「かたづける」の前身になる下二段活用の他動詞はまだ生じていなかったとみられる。

中古に入って、仮名文に「かたづく」の例が見当たらないが、「かたづく」が中古においてしばらく古語、もしくは廃語になっていたことを論証することはむずかしく、ただ中古において「かたづく」が使われ続けていたとしても、位相的にかなり限られた範囲のことではなかったか、と前田氏は推定しておられる。

中古末から中世初期に、歌の中に「かたづく」の例がある。その一つは、源俊頼の

夕まぐれ山かたづきて立つ鳥の羽音に鷹をあはせつるかな（千載集　巻六）

で、「鳥が山の側をかすめるようにして飛び立つ」という動作を「かたづく」で表している。万葉集における用法よりもやや動的な表現で、〈大きなものの側に寄る〉という語義の中核には変わりがないが、わずかな意味の変化が認められる。

中世後期にみられる「かたづく」の例は、〈何かの側に寄る〉意味からやや比喩的に〈一方に偏る〉意味を表すように変わったことを示している。たとえば

…佛ノ出世ニ逢テ説法ヲ聞テ修行スレハ成佛スルソ、サナケレハ成佛セヌソ、是ハ不定モノチヤ程ニ一方ヘカタツキハセヌソ（四河入海　巻五之三）

のような例がある。また、四段活用の自動詞「かたづく」に対応して、下二段活用の他動詞「かたづく」（現代語の「かたづける」の前身）が生じてきている。『日葡辞書』には「カタヅケ、クル、ケタ」という下二段活用のほうだけが掲げられていて、「散らばっていた物を或る離れた場所に置く」という、現代語と近い意味が与えられている。

近世に入ると大体現在使われているような諸用法が生じてきている。第一に、じっさいに〈片側に寄る〉動作を示す例としては、

右十五丁中材木町と云。しにいへは總て堀川に片付てありしと也（京町鑑　組町部類）

笠を取て片付ろと、いへども更に答なし（役者論語　藝鑑）[4]

のようなものがあるが、大体近世前期にかたよっている。

第二に、中世の『四河入海』の例などの意味の系列にはいるものとして、「一方に片寄る」「ある方向に寄って落ち着く」という例がある。

合戦のかちは、才徳勢力のつよきが運にかちぬれども、後途のつまりの国をとることは、運のつよき方へかたづくもの也。（翁問答　下巻之本）

…此男へ書きつくして外へは、届けの文さへやらざりければ、いつとなく客たえて、物日の淋しきを皆請取って、至りぜんさくになって、烏徳一人にかたづき（傾城禁短気　六の二）

第三に、「ある所に落ち着く」ことの中の、特に限定された意味として「縁付く」ことをあらわすものがある。

又男も女も、さながら分道知らぬにはあらで、あれも疑ひ是も覚束なくて、生涯片付かぬも有。（艶道通鑑　一の七）

は男のむこ入りも含んでいるとみられるが、

五叔とはていしゅの妹なりおばさんといふこゝろ江戸のまん中へかたついてゆくと女郎がおくるなり（蕩子筌枉解）

のように女性を動作主体として「嫁に行く」ことをあらわす例が多い。

「かたづける」も、第一に、「片側に寄る」意味のものがある、ということである。[5]

第二には、〈整理する〉〈落ち着かせる〉意味で、日葡辞書に記述されていた意味をうけついでいるものである。

「少しは胸に法もありますヨ」トいひながらそこいらをかたづける（春色梅児與美　初編巻之二）

マア待つし、此処らを些かたづけよう（七偏人　二上）

右の二つの例において、「かたづける」の目的語は「そこいらを」「ここらを」という場所目的語であって、対象目的

語ではない。こういう言い方が近世からすでにあったことがわかる。

土の底へは入られず。天へ昇る梯子はないか。隠蓑隠笠があらほしやと。我身一つを片付けかねて震ひゐる。（博多小女郎波枕　上）

の「我が身一つを」は対象目的語であるが、捕吏から身を隠して落ち着かせることができないという場面である。

晋子が性、人にまぎれねば、楽天が飲酒はなをかぎり有けりとて、用の事かたづけ侍りぬ。（葛の松原）

は目的語が「用の事」で具体名詞ではなく、処理して終らせることを言っている。

近世の「かたづける」は、右のほかに、

ハイ、相応な所がございましたから片づけました。（浮世風呂　二の上）

のように〈嫁入りさせる〉意味の例が多くあり、

きやつあらだてゝはあしかりなん酒にゑはせてかたづけんと思ひ（鎌田兵衛名所盃　下）

のような〈人を殺す〉意味の婉曲的な表現もある。

近代に入ると、「かたづく」「かたづける」の、「片側に寄る」という第一の意味は使われなくなった。したがって、「かたづく」は第二の「一方に片寄る」「ある方向に寄って落ち着く」のような用法が中心となり、中でも具体的に「物が整頓された」状態を表す意味と、特に「物事が解決する」ことを表す意味が目立ってくる。また、「嫁に行く」意味の例も多い。一方、「かたづける」は「整理する」「落ち着かせる」のような用法が中心となり、特に「物を整理する」意味で使うことが多く、「処理し終えた」結果に重きをおく用法も多い。第三の「嫁にやる」「殺す」も近世の用法と同じく使われている。

以上、前田氏の論文によって、「かたづく」「かたづける」の歴史的な意味の分化をたどってみたが、室町時代については『時代別国語大辞典　室町時代編二』の同項目を左に引用して参照してみよう。

かたづ・く〔片付く〕「片付（カタヅク）」（易林節用）㊁（自動四）①対立または並立している両者の間にあって、そのいずれか一方に身を落ちつけるところとなる。「戊ハ中ノ心ゾ。五土十干（カン）ノ中ニ、土ハ中央ニ木火土金水ト次第シテ四行ノ中ニイテ、ドチヲモウケテ相剋ノヨナヲシヲスルゾ。中央ニイテ一方エカタヅカヌゾ」（詩学大成抄二）「四郎殿を旗本にして、我等働出る程ならば、恐は一日の間に尾州は此方へかたづき申べきと存候へ共」（甲陽軍鑑品五十二）②混沌とした状態に決着がついて、一定の結論がでるところとなる。「王ハ天地ノ気ヲウクルホドニカタツイテ、天地ノ中ノ気ノアル所ニミヤコヲ立テイラルヽゾ」（詩学大成抄四）「この姫は天よりあたへ給ふ子なれば、いかさまゆへある人の再来なるべし。…ありのまゝに奏聞したてまつり、勅諚にまかせて、ともかくもかたづきはんべらんとて」（短編＝鶴の草子下）

㊂（他動下二）①ある物の帰趨をめぐって対立している事態において、一方に結論を下す。「糺明シテモノヲ一方ニカタヅクル。―裁断によって物を人に引渡す」（羅葡日 Addico）「味道が宰相ニナツタニ人が物ヲトウ、一方エヲトシケヌゾ。両方ヲ以テヨイトモワルイトモカタツケヌゾ」（玉塵十七）「一方があやまったらば、よういふた方へやらふずれ共、いづれもおなじやうなれば、かたつけうやうがなひ。そちへやればこちのうらみ、こちへやればそちのうらみ」（虎明狂＝茶壺）②散らばっているものを、しかるべき一定の場所におさめる。「Catazzuqe, uru, eta.（カタヅケ、クル、ケタ）。散乱していた物をある場所に別にして置く」（日葡補）「〈逐電シタ傾城町ノ〉十蔵諸道具番致候事迷惑之由、けいせゐ町の者共侘言申に付て、加兵へ我等検使を差越、傾城町の者共同前に十蔵家の内へかたつけ、符判を致、我等足軽壱人番に付置候」（梅津日記慶長十七、八、十八）③混乱に巻込まないように、妻子・眷属などをしかるべき処に移して、その生活の安定をはかる。「足手マトイニ成ニ仍テ、妻子ヲ方ツケテ、ソシテ蜀へ行ントシタレバ」（杜津考序）「返々一人ハ坊主（バウズ）ニサダメ、ソノ外（ホカ）ノ子共（コドモ）ヲ差急（サシイソギ）ソレソレニカタツケベシ」（本福寺跡書）「信玄公へ内通仕たる侍大将衆の人質を取、甲州府中へ指越、其人々の郎等、内の者上下各を甲州下山へかたつけ、奥

津の横山に城を取、普請を被二仰付一」（甲陽軍鑑品卅四）④むすめを他家に縁づける。嫁がせる。「御示現に従ひてむすめをいかやうにもかたつけ〈奈良絵本「有つけ」〉はんべらん」（短編＝東洋大本さゝやき竹）

語義の記述が周到懇切であり、用例も豊富で、参考とすべきところが多いが、小論のテーマとのかかわりでは〈嫁に行く、やる〉のうちの少くとも〈嫁にやる〉ほうの「かたづく」（他動下二）は室町時代にまでさかのぼるようだ、という点が特に注目される。

三

以上に諸先学の探索をたよりに「かたづく」「かたづける」の現代語における意味と、それに至る歴史的な意味の分化、展開をみてきた。ことばの諸側面のなかで、意味はもっとも連続性の多い、境界の明らかでない性質が著しいとされている。そういう意味をできるだけ客観的にとらえるために「語彙論的統語論」(lexico-syntax)[6]の考えにより、動詞の格支配の面からしらべてみよう。ちょうど『日本語基本動詞用法辞典』[7]が基本的な動詞七二八語の結合価を分析しており、その一項目として「かたづける」が取り上げられている。左のとおりである。（原文は横書き）

(1)散らかっている場所をきれいにする。

《文型》〔人〕〔が／は〕〔所〕を片づける

(例)母が部屋を片づけた・机の上〔引出しの中〕を片づける

(2)散らばっている物をきちんと整える。

《文型》〔人〕〔が／は〕〔物〕を〔所〕〔に／へ〕片づける

(例)洋子は本を本棚に片づけた・書類〔おもちゃ／食器／ふとん〕を片づける

(3)物事を処理したり、解決したりする。

≪文型≫〔人・組織〕〔が／は〕〔事〕を片づける

(例)弘は宿題を片づけた・政府は領土問題を片づけた・仕事〔難問・課題〕を片づける

(4)嫁にやる。

≪文型≫〔人〕〔が／は〕〔娘〕を〔所〕に〕片づける

(例)彼は娘を立派な人のもと〔名家・旧家〕に片づけた

「かたづく」は取り上げられていないが、他動詞「かたづける」に対応する自動詞という性格から、わりあい容易に右と同じ様式で記述することができる。用例などもできるだけ同じものを踏襲して、同じ書式で左に書いてみよう。

(1)散らかっていた場所がきれいになる。

≪文型≫〔所〕〔が／は〕片づく

(例)部屋は片づいた・机の上〔引出しの中〕が片づく

(2)散らばっていたものがきちんと整理される。

≪文型≫〔物〕〔が／は〕〔所〕〔に／へ〕片づく

(例)本は本棚に片づいた・書類〔おもちゃ／食器／ふとん〕が片づく

(3)物事が処理ずみになったり、解決されたりする。決まりがつく。

≪文型≫〔事〕〔が／は〕片づく

(例)宿題が片づいた・領土問題は片づいた。仕事〔難問・課題〕が片づく

(4)嫁に行く。(多くは親の立場から言う)

≪文型≫〔娘〕〔が／は〕〔所〕に〕片づく

(例)彼の娘は立派な人のもと〔名家・旧家〕に片づいた

右の記述を試みて、現代語における「かたづく」と「かたづける」とは、自動詞と他動詞の対応がかなりよく保たれていることが示された。

現代語より以前に存在した意味・用法のうちのかなりの部分は、右のいずれかの項目の前身として理解されよう。その範囲に入らない意味・用法に対して、同じ方法を適用して考えることは、厳密には成り立たない恐れがあるが、近似的な意味であえて試みることにする。

「かたづく」の出発点ともみられる、万葉集の歌の例は、

〔建造物〕{が／は}〔所〕{に／へ}かたづく

という文型とみられる。〔所〕というのは、「海、山、谷」などの大きい自然物であり、そのかたわらに住居しているという、位置関係の状態表現である。「に／へ」という格助詞は三例の歌にいずれも存在しないが、現代語との類比の便宜上想定したにすぎない。

時代を下って源俊頼の「鳥が山かたづきて立つ」という歌における「かたづく」は、

〔鳥〕{が／は}〔所〕{に／へ}かたづく

とあらわすことができよう。

室町時代の『時代別国語大辞典』の自動詞「かたづく」の①の意味、すなわち「尾州は此方へかたづき申べき」（甲陽軍鑑）などは、

〔組織〕{が／は}〔組織〕{に／へ}かたづく

という文型と解され、現在は普通使われていないものである。

同辞典の語釈に「対立または並立している両者の間にあって」とあるように、軍勢、社会的組織のはりあいの中で、いずれに接近するかというような文脈の中で使われる「かたづく」は、万葉集の歌におけるそれからみれば、おのずと大きい

意味的な変質を生じているはずである。前田氏が、中古から中世へかけてのいずれかの段階で、やや比喩的に「一方に片寄る」意味を表すように変わったと述べられたことの背景に、右のような事情があったのではなかろうか。

同辞典の②「混沌とした状態に決着がついて、一定の結論がでるところとなる」という意味は、①の意味が抽象的になって生じたものと解しうるであろう。前に現代語について立てた

〔事〕〔が／は〕かたづく

という文型にはいるものと考えられる。

同辞典の他動詞「かたづく」（下二）は四つの意味を立てており、①「ある物の帰趨をめぐって対立している事態において、一方に結論を下す」については、考えるべき点が多い。自動詞「かたづく」の①②と意味の上で強い対応関係にあるのであろう。羅葡日対訳辞書における、ラテン語“Addico”に当てはめられた「糺明シテモノヲ一方ニカタヅクル」は、ポルトガル語による「裁断によって物を人に引渡す」という説明によって、

〔人〕〔が／は〕〔物〕を〔人〕にかたづける

という文型だと理解され、現代では普通使われていないとみられる。時代別国語大辞典の同じ項に引かれている狂言「茶壺」の例は、ちょうどこれにあてはまっている。この例の直前に挙げられている「玉塵」の例「両方ヲ以テヨイトモワルイトモカタツケヌゾ」は〈裁断する〉というところに意味の重点がおかれていて、

〔人〕〔が／は〕〔人・事〕を〔述語〕とかたづける（「と」は、引用の「と」）

という文型であり、現代ではあまり使われてはいないようである。

時代別国語大辞典の「かたづく」（他動下二）の②は「整理する」、④は「嫁がせる」の意味で、さきに見た現代語「かたづける」と同じ文型で説明ができる。③は、

〔人〕〔が／は〕〔妻・子など〕を〔所〕〔に／へ〕かたづける

という、④に近い文型であろう。④の「嫁がせる」の意味は、②の「整理する」の意味から派生したものとは限らず、むしろ③のような、庇護すべき人をある所に落ち着けて安定させるという意味から生じてきたものだという可能性があるのではなかろうか。

以上、時代別国語大辞典の各項目の記述を主に検討する結果になったが、「かたづく」「かたづける」の現代語とことなった格支配のありようを眺めた。上に挙げてきた用例の範囲では、ほかには特にあげるべき文型はないであろう。

「かたづく」「かたづける」が述語になって作り出す文型の面からみてきたが、それをも参考にして意味の具体的な実質の面から、語義の展開してきたあとをかえりみると、どうであろうか。まず、はじめ空間的な位置や移動の単純な表現であった「かたづく」か、〈移動先が注目されていた情況の中で、ある移動先に移動し、落ち着く〉という、社会性をおびた意味の方向にまず転じたのではないか。中世後期には生じていた「かたづける」の前身である「かたづく」(下二段)にも、対応して同じような動きが想定される。〈移動〉そのものよりも、その結果である〈落ち着く〉あるいは〈落ち着ける〉というところに意味の重点が移ると、〈落着〉〈結着〉、〈解決〉、〈終了〉のような方向への変化が生じてくることは理解しやすいことである。

落ち着く、あるいは落ち着けられるのは、移動の主体自身である。ところで、移動主体が移動した結果、移動主体のまわりにある者、あるいは移動させた者が、じゃまな存在がなくなってさっぱりする、というような事態の表現にも展開して行き、この方が現代ではむしろ主流になった。他動詞「かたづける」は、〈さっぱりした状態になるように処置する〉〈処理〉〈解決〉のような方向に転じて行きやすかったであろう。

結び

「かたづける」の〈嫁にやる〉という意味は、この動詞のもっとも基本的な意味ではないであろうが、しかし、特殊な臨時的な一つの用法にすぎないわけでもない。多義の中の一つとして相応の存在を保っていることは、現代のあれこれの国語辞典の記述にも反映されている。そして、多義語の内部における有契性という観点からみると、現代語としては基本義になっている〈じゃまな物を整理してきちんとした状態にする〉という意味からの派生義として意識され、理解されている。このことは、第一節でみた、専門家による意味分析と、アンケートの結果から言えるであろう。これは、現代語の共時意識として、ごく自然な、当然な意味関係に対する解釈であろう。

このような意味関係の解釈からは、第一節の後半に引用したアンケートにもはっきりと表れたように、娘をじゃまな物に類比するような発想から生じた意味として、性差別的な表現の一例として批判されるようになるのも、自然な成り行きと言うべきであろう。もちろん、親の立場から身内の者をへりくだって表現する意図も含んでいるという解釈が生じることは、さきのアンケート回答の(6)にもうかがわれる。しかし、「愚妻、荊妻、愚息、豚児」のような語があまり好まれなくなってきたのと似たような意味で、〈嫁にやる〉意味の「かたづける」は敬遠され、すたれていく可能性もあるかもしれない。

右に、他動詞「かたづける」の〈嫁にやる〉という意味について述べてきたことは、これに対応する自動詞「かたづく」の〈嫁に行く〉という意味についても、およそ対応的に当てはめて言えることであろう。

このような共時論的な事実、現象は、通時論の観点から眺め直すと、どのようになるであろうか。第二節において、諸先学の研究をたよりにこの二つの動詞の歴史をたどってみた結果、共時論とはくいちがいが生じる可能性があるとみられる。すなわち、前田氏は近世における「かたづく」（四段活用）に関して、

さらに、第三に、「ある所に落ち着く」ことの中で特に限定された意味として、『好色訓蒙図彙』の「いまだかたづかぬお姫様など「嫁に行く」ことを表わすものがあり、『艶道通鑑』『心中恋の中道』『蕩子筌枉解』『規矩の信

折』『浮世風呂』『かゞみ磨』など例が多い。

と述べられている。近世において、「かたづく」に〈物（場所）が整頓されてきちんとなる〉という意味がすでに生じていたかどうかについて前田氏は特に明記されていない。しかし、「かたづける」に〈整理する〉の意味はすでにあったわけなので、「かたづく」に対応する意味がすでに生じていた可能性はあるだろう。しかし、右の前田氏の意味関係についての解釈は注目に値する。

第一節で述べたように、時代別国語大辞典の「かたづく」（他動下二）の項において、四つの意味が立てられている中で、④の〈嫁がせる〉の意味は②の〈整理する〉の意味から派生したものとみるよりも、③の〈庇護すべき者を安全な所に落ち着かせる〉のような意味と近縁関係にあるとみることができるのではなかろうか。

もっとも、この仮定が成り立ったばあいにおいても、現代語の意識における右に述べた現象は、否定しえない事実として存在する。「かたづける」の〈嫁にやる〉という意味は〈物を整理する〉という意味から派生したのだという、意味関係の解釈は、少なくとも民間語源説的な現象として、かなりはっきりと存在している。

小稿で「かたづく」「かたづける」について調べてみたことの結果は、一般化して言えば、池上嘉彦氏が『意味論』[8]で「多義性の構造」について述べられている次のことの後半の、一つの事例だということになるであろう。

通時的な有契性の痕跡が残っている場合はそれが共時的な有契性としても感じとられることはもちろん多いが、共時的なレベルでの有契性が通時的なそれとは異なった形で認められるということもありうる。

注

（1）『放送研究と調査　36―11』（一九八六）所収の最上勝也「働く女性のことばの意識」

（2）平凡社選書七三（一九八二）

（3）角川小辞典　8―2（一九八四）

（4）「かたづきろ」は、日本古典文学大系（歌舞伎十八番集）の頭注に「傍に片づいていろ。片寄っておれ」と注されている。あるいは、「かたづきゐろ」の略であろうか。

（5）この意味の例として、前田論文に『幼稚子敵討』の「片付（かたづけ）〳〵。ハテ片付といふに」があげられているが、単純にみると四段活用の「かたづく」の命令形のようにみえるので、いま保留とする。日本古典文学大系（歌舞伎脚本集上）の頭注には、「道路の片側に寄れ。片寄れ」と注されている。

（6）仁田義雄『語彙論的統語論』（一九八〇　明治書院）

（7）小泉保他四氏編（一九八九　大修館書店）　以下に筆者の案によって文型を表示したばあいも、この書の凡例にのせられている〔意味特性〕一覧などにほとんど従った。

（8）池上嘉彦『意味論　意味構造の分析と記述』（一九七五　大修館書店）